

四 身心脱落、脱落身心

他の言を容易に受け付け得ざるものは不幸である。何事もハイと受込むことをしないで、聞くでもなく、聞かぬでもなく、煮え切らぬ程困つたものはない。南隠禪師の許に一學生來りて、法門が授かりたいと云ふ。見るからに氣色、生意氣らしく、鼻先に學問ぶらさげて居る有様に。禪師、打ち解けて愛想よく、「サアくおあがり」と、茶碗に茶を並々と注いで出す。學生もぢくくして、まだ飲まないうち、禪師はまた注がうとせられる。學生あはたゞしく遮つて、「ア、茶は澤山にあります、もう入りませぬ、溢れるばかりです」。「ア、左様か、汝の胸中、邪念充ち満てり、法門授けんとして、豈入るべけんや」お前の胸中には邪見の茶が充ち満ちて居る。此の上法門は入れやうとしても、這入りはせぬ。先づその邪見を捨て、只管法を聞けとのことでありました。

尾張名古屋の萬松寺は、尾州侯の菩提寺であり、曾て洪川と云ふ大徳が居られた。或時、一人の雲水が來つて、和尚に謁を乞ひ、劈頭大音に云ふ。「久しく洪川(香煎)ときく、麥香煎か米香煎か」。和尚對へて曰く「試に喫却せよ、見ん」と。久しく洪川と云ふ名を聞くが、一たい麥香煎か米香煎か、どちらだ。香煎と云ふのは、麥こがしとも云つて、夏頃日長の時分に、よく喫べるものである。麥香煎か米香煎か、換言すれば、向上か向下か。洪川汝の證悟は如何、どんな味がするかいと、かゝつて來た。それで、試に喫却せよ見ん。喫べて見よ、そしたら解るだらう。人に聞くより自分で味つて見たがよいとやつた。奴さんそれが解らない、何ッ喫却せよとな、喫めよとならば喫めてやる、この和尚が……と云ふ劍幕で、カーツと大喝一聲した。その途端、和尚忽ち雲水の背を撫で、「オ、咽たかく」と言はれて、につ

こり。

「才、咽たかく」。私共は咽にひつかけてむせなかつたから、仕合であります。大抵が、哲學を研究すれば哲學にむせ、科學を修習すれば科學にむせ、道德を論じて道德にむせ、佛法を研究せんとして佛法にむせて了ふ。むせるのは未だ咽喉を通過せぬからである。いづれも其の眞意義に徹底しないのだ。彼の上杉謙信がまだ佛門に入らない以前、輝虎と云つた血氣旺んの頃、頗る禪に志して普く諸山の知識を訪ひ、大に所得を積んで、内心甚だ慢ずる所があつた。偶米澤林泉寺の宗謙禪師が、機鋒甚だ鋭いと聞いて「彼、何程の事かある、直に挫ぎくれん」と、微服して他の參禪者と共に、和尚の道場へ參つた。時恰も、「梁武帝達磨初相見の話」を提唱して、峭峻なること舌頭火を吐くが如く、燦たる眼光は屢々輝虎の微服姿を直射した。

提唱の終るを今や遅しと待ちかまへた輝虎、直に丈室さして入室獨參を申込んだ。和尚の許を得て、輝虎、右の足を一步、室に運ぶや否や、大喝一聲「達磨不識の話、什麼と合點參つたか」と和尚に切込まれ、不意に打たれた輝虎、答へる術もなく擬議猶豫せる様を見てとつた和尚。破顔一笑「太守は平生よく御饒舌なざる様子、何故説破せられないか、いざぐ」と、心憎きまでに悠然として居る。「サア、早く何とか仰しやつて見られよ、早く」と急き立てられて、輝虎いよく行詰り、眼ばかりパチツカせて、仁王立に立ちすくみ、背も額も汗づくぐ。輝虎の我慢は却つて挫がれて、心から和尚の定力に心服した。和尚靜に顧て「此の事を會せんと欲せば、須らく大悟一番し來れ！」と。此の一言輝虎の身骨に徹した。畏れ退いて自ら參究すること數月。大に省悟する所あり、髮を剃つて入道し、改めて宗謙禪師の門に入り、禪師も感じて、謙の一字を與へ、彼は名を謙信と改め、號を

不識庵と云つた。蓋し不識庵の名は、最初提唱に接した、達磨不識に因んだこと勿論であります。

思ふに、宗謙禪師の峻烈なる説得に、輕心高慢なる輝虎は碎けて、熱心謙虚なる謙信は生れたのである。その刹那、むせて喉にひつかゝつて居た禪法は、遲滞なく彼の心に徹したのである。誠に邪見僣慢弊懈怠は、この法を信受することが難い。即ち何物をも打ち措いて、徹底的に如來の大悲に歸依するのであります。